

公 募 様 式

1	滝沢、漆ヶ久保集落跡	P 1
2	芝平石灰岩採掘場跡／芝平集落	P 2
3	阪本天山の墾田の碑	P 4
4	黒河内森林鉄道跡	P 5
5	溝口露頭	P 6
6	板山露頭	P 8
7	和泉原井筋跡	P 9
8	月蔵井筋跡	P 1 1
9	美和一貫水路	P 1 3
1 0	六道原一番井	P 1 4
1 1	大島二番井（北原平八郎）	P 1 9
1 2	伊那電車軌道／Ωカーブ	P 2 4
1 3	段丘崖及び断層崖の斜面樹林	P 2 5
1 4	横井戸	P 2 6
1 5	ふるさと美篤の水の話（出版物）	P 2 7
1 6	美篤青島の千社参り	P 3 1

※「公募様式」に記載された地域資源の名称は、「資料－2」などに記載した名称と異なるものがある。
（選定済み地域資源との整合性を考慮して、修正したものがある。）
（公表することにより、特定の個人を識別することができ、個人の権利利益を害する恐れがあるものと考え、赤着色部分は非公開とします。）

①地域資源の名称

滝沢、漆ヶ久保の生活跡

②地域資源の所在地

中川村大草桑原



1 : 50,000

③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由 (提案する地域資源に対する想いを記す)

- ・三六災害まで暮らしていた山間部の集落跡、屋敷跡、
- ・屋敷の石垣、水田跡、墓石などの生活遺構が今も残る。

(写真) 上…滝沢の水田の石垣と墓石、
下…漆ヶ久保の細屋敷跡

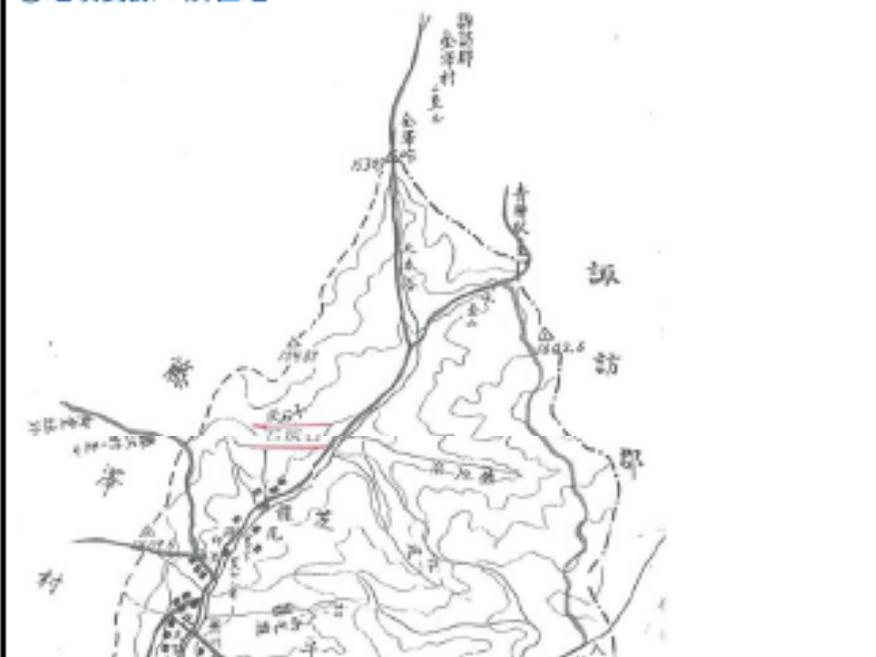
⑤連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません)



①地域資源の名称

芝平石灰岩採掘場跡／芝平集落

②地域資源の所在地



③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

伊那市高遠町芝平は、中央構造線の外帯に位置し、石灰岩が多く採れます。江戸時代の1834（天保5）年には高遠藩に産物会所が置かれ、その後幕末から中央線が開通する1904（明治37）年までが最盛期で、毎日100頭を超える馬の列が山道に連なり、「仕事が豊富で栄え、よその村から多くの方が働きに来た」と1884（明治17）年の記録に残されています。

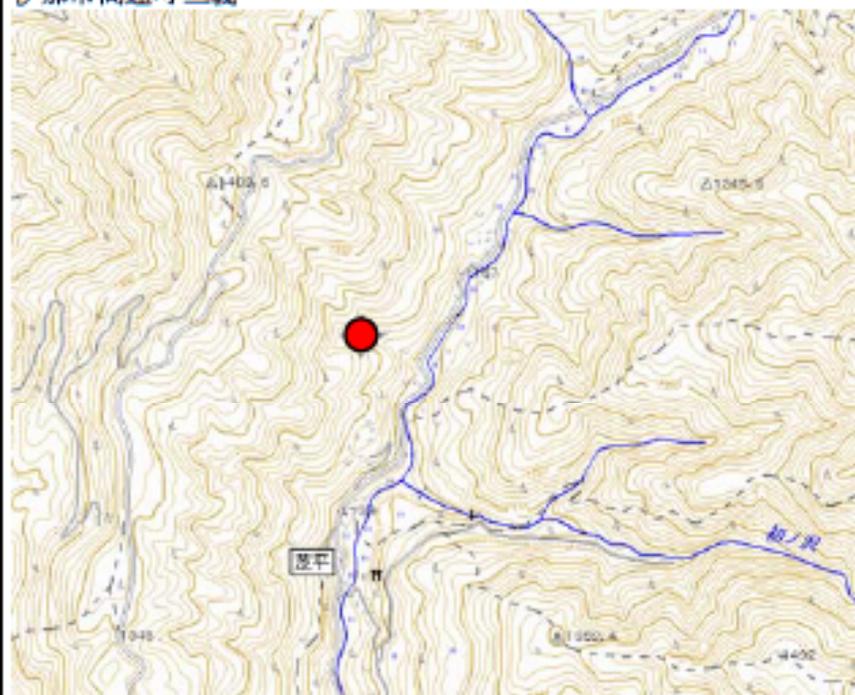
伊那谷は、御嶽山の火山灰が堆積して酸性が強いため、生産した石灰は、土壌を改良する肥料として、地域の発展に大きく貢献しました。また、石灰岩が乏しかった諏訪地方にも輸送されましたが、中央線の開通で塩尻と小野の石灰が入るようになって芝平集落は廃れてしまいました。

芝平石灰岩採掘場跡は、全国的にも希な地球活動の痕跡を示す中央構造線の外帯に位置していることを体感することができ、芝平集落は自然の恵みを活かして生活してきた先人の足跡を垣間見ることができることから、選定基準②及び③を満たしていると考えられます。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報第三者へ開示又は提供しません）

①地域資源の名称
芝平石灰岩採掘場跡

②地域資源の所在地
伊那市高遠町三義



③地域資源の写真



釜の跡

(写真やイメージ図などを貼り付けて下さい)

④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由 (提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です)

伊那市高遠町芝平にある石灰山からは純度90%を越える炭酸カルシウムの石灰岩が無尽蔵に生産され、最盛期には、毎日馬の列が山道に連なり、仕事が豊富で栄え、よその村から多くの方が働きにきました。中央線の開通で塩尻と小野の石灰が入るようになって廃れましたが跡地には、採石場と切り出された石灰石を運ぶために敷かれたトロッコ道、窯の石組みなどが残っています。

⑤連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報第三者へ開示又は提供しません)



①地域資源の名称
 阪本天山の鵜田の碑

②地域資源の所在地



③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

この地域一帯は天竜川が常に流れを変え、手のつけられない荒地でしたが、寛政元年（1789年）の大洪水で一帯が干潟になりました。そこに目をつけた高遠藩の中村家が年月をかけて山腹に天竜川からのバイパス水路を完成させ、鵜田に成功して現在に至っています。鵜田の碑を刻んだ巨石は花こう岩で、中央アルプスの頂上付近から氷河によってしらび平まで押し出され、土石流によって太田切川を下り、天竜川を横切ってここまで運ばれたものです。高遠藩の阪本天山（江戸期の有名な砲術師範）は鵜田事業に感嘆し、目立つこの巨石に記念の文を刻んで石碑としたそうです。さらに、干潟になって追いつけなくなった河童と川奉行の中村氏で「河童の妙薬」という痛風薬発祥の伝説もあります。高さ3m×底は8畳敷ぐらいのこの巨石、天竜川史跡としての貫禄申し分ありません。残念ながら、年月の風雨暴露で刻まれた文字の判読はほとんど難しいですが、一部は画像のように確認できます。旧取水口も残っており、この石の周りは草木で覆われてしまわないよう、いつも地元の方の管理が行き届いており、大事にされていることがわかります。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）



⑥ 地域資源の名称

黒河内森林鉄道

⑦ 地域資源の所在地

伊那市長谷黒河内



蟹坂貯木場

⑧ 地域資源の写真



当時の森林鉄道と蟹坂貯木場



⑨ 地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

昭和14年頃完成し、昭和31年まで機関車が走っていました。

戸台集落は70戸程、分校もあって賑わった地域でありました。森林鉄道は、木材、薪炭、生活物資、人員輸送も兼ね黒河内国有林の動脈として機能し、生活に密接な関わりを持っていました。

⑩ 連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）



①地域資源の名称
中央構造線溝口露頭

②地域資源の所在地
伊那市長谷溝口



(位置が分かるように地図などを貼り付けてください)

③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由 (提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です)

信州から静岡県浜松市(旧春野町)にある秋葉神社へ向かう歴史の道“秋葉街道”。中央構造線のずれ動いた断層部分が侵食されてできたまっすぐな谷を利用されてできた道です。溝口露頭から分杭峠を遠望すると一直線の谷を実感でき、露頭を見ることでその谷を作った大地の境界を見ることができます。谷を作った中央構造線を知ることで、ヒトとジオ(大地)のつながりが体感できます。

⑤連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません)

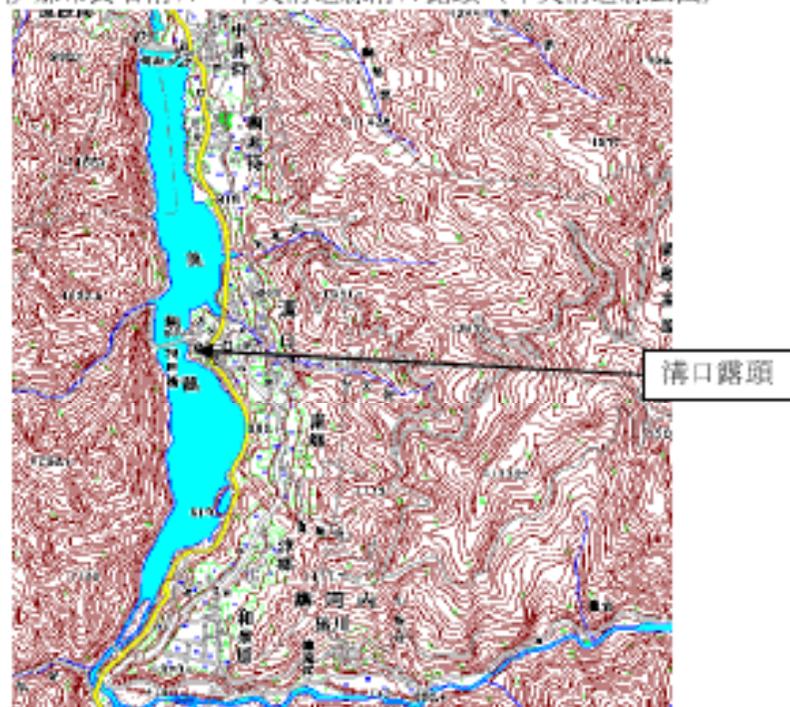


① 地域資源の名称

溝口露頭（中央構造線）

② 地域資源の所在地

伊那市長谷溝口 中央構造線溝口露頭（中央構造線公園）



③ 地域資源の写真



（写真は、南アルプスジオパークホームページから転載）

④ 地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

この露頭では、領家変成帯の砂泥質片麻岩と、三波川変成帯の間に、地質境界の中央構造線が観察できます。中央構造線に沿って、約1500万年前に入り込んだマグマが幅4mの珪長岩脈をつくっています。露頭から少し離れた所からは、幅10mの砂泥質片麻岩の左側に花崗岩が変形した岩石を観察することができます。南方には分杭峠の断層鞍部が眺望でき、周辺は中央構造線公園として整備されています。

⑤ 連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）

[Redacted contact information]

①地域資源の名称
中央構造線板山露頭

②地域資源の所在地
伊那市高遠町長藤



(位置が分かるように地図などを貼り付けてください)

③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

板山露頭展望台からは、中央構造線のずれ動いた断層部分が侵食されてできたまっすぐな谷を遠望できます。そこは、左右のでき方が違う大地がずれ動いてできた境界で、急峻な西側の斜面と緩やかな東側の斜面を見て全く異なる地質でできていることを実感できます。また、守屋山も眺望できます。そして、その証拠である板山露頭で中央構造線の境界を直接見ることができます。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）

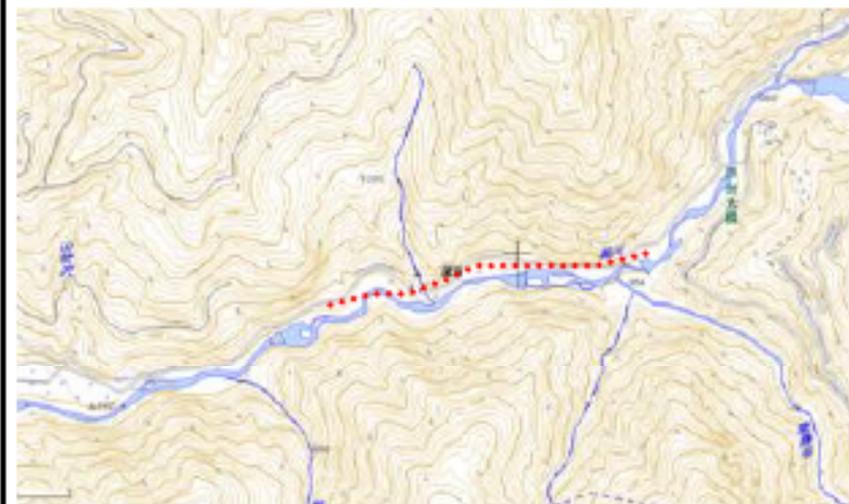


①地域資源の名称

黒河内井筋・和泉原井筋

②地域資源の所在地

伊那市長谷黒河内



(延長はもっと長い)

③地域資源の写真



(写真やイメージ図などを貼り付けて下さい)

④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

三峰川の河岸段丘の上の集落である和泉原や、溝口の高台の集落は安定していますが、お米を作るための水を確保することが難しい地域でした。江戸時代、長谷杉島出身の“伊東伝兵衛”さんは、自分の財産も使って、上伊那中の水路（井筋）を作りました。長谷の井筋は、鷹岩堰堤付近から取り入れた水を和泉原や溝口へ送る計画で、途中、鷹岩付近の緑色岩（海の底に沸きだした硬い溶岩）を掘るには、1日掘ってやっと弁当箱1杯にしかならないほど大変な作業でした。伝兵衛さんが生きていたうちに完成はしませんでした、それを引き継いだ人達が完成させました。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）

[Redacted contact information]

①地域資源の名称

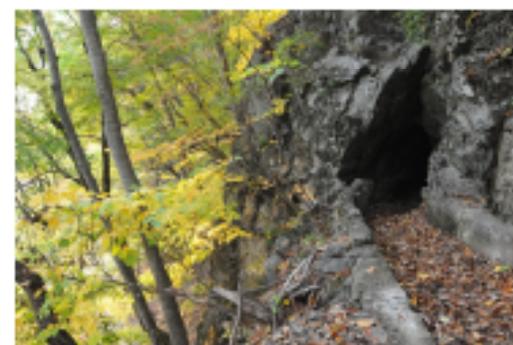
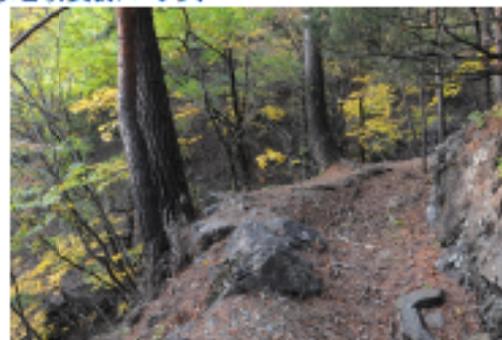
和泉原井筋

②地域資源の所在地

伊那市長谷 戸台口～黒河内和泉原



③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

黒河内村の開田のための導水は、伊東伝兵衛により崖井筋として天保4年より工事に着手したが、あまりの難工事のため再三にわたり放棄されてしまった。黒河内村は明治4年の第1次通水までは溝口村とともに井筋の掘り通しに努力したが、かんがい不可能として起工以来42年もの間夢にまで見た井筋を明治7年に断念してしまった。

その後、和泉原の久保田朝太郎によって別の水路が引かれ、昭和18年和泉原の開田が実現した。

その水香を穴澤たつの（穴澤辰幸の母）が取り入れ口から和泉原まで毎日9kmを見て歩く。台風の際は朝も夜も取り入れ口と沢の水の調整を行った。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）



①地域資源の名称

月蔵井筋跡

②地域資源の所在地

伊那市高遠町三義～東高遠



(位置が分かるように地図などを貼り付けてください)

③地域資源の写真



④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

この井筋は高遠藩直営で工事が行われ、弘化4年(1847)山室川上流の三義赤坂から取水し幅2尺、長さ3里あまりを月蔵山にトンネルを掘って背越しし、沿線の灌漑を行うとともに東高遠の武家屋敷や高遠城にまで引水して御用水として使われました。灌漑用水としては昭和中期頃まで使われた。

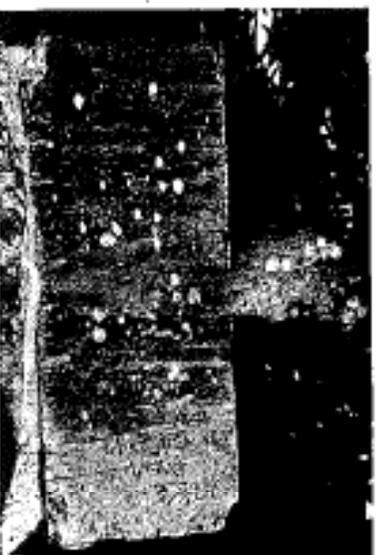
⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報第三者へ開示又は提供しません）

[Redacted contact information]

一 月藏井筋の記念碑

高遠城主の内藤頼重は、藩財政の建てなおしを行うため、各所に井筋を凿いて親の増収をはかったが月藏井筋もその一つである。

この井筋は弘化四年（一八四七）三張赤坂から上水し



記念碑の断面

幅二尺、長さ三
里余、月藏山を
越え東高遠に達
し、沿線の灌漑
に当てることも
に武家の御用水
ともなった。

これは全く藩

直営で行ったも

ので、井筋奉行

の一人である清

次兵作の凿いた

「御用水御普請

日記」によると、

利口赤坂から東

高遠の郷方役所まで七八〇〇間その間に利口と板山間に
人夫の泊る小屋を建て、奉行は毎日そこに出て監督に当
っていた。この余線を敷か所に区切り、各責任者をま
め、そこを請け負わせて仕事を怠いたので、この年六月
一日に水廻りが終わり、七月二十六日には通水試験が行
われた。これに従事した人夫は領内各村に割り当てて出
させ、このときの「作料勘定仕分帳」を見れば、人夫を

職人と人足に区別し、職人は黒俵九二〇人石工二〇三六
人、相五二人となっているが、これらの職人は通元のほ
か三州、美濃からも来ている。

この碑は三張中屋溝御普請の贈答の石垣に横み込んで
あったが、先年井筋を修理したとき掘り出して今裏御堂
の庭にある。

この碑面には「郡代・浅井又七郎、岡野小平治、井水
善行、池上三右衛門、清次兵作、近藤彦蔵、田中吉助兵
衛、老路役、利口村名主、松之丞、八郎右衛門、長左衛
門、山室村名主、清右衛門、利兵衛、平蔵、弘化四年未
歳八月」と当時関係者の名前が刻まれている。

碑は高さ三〇センチ幅八〇、奥行一九センチの角柱で

①地域資源の名称

美和一貫水路

②地域資源の所在地



③地域資源の写真

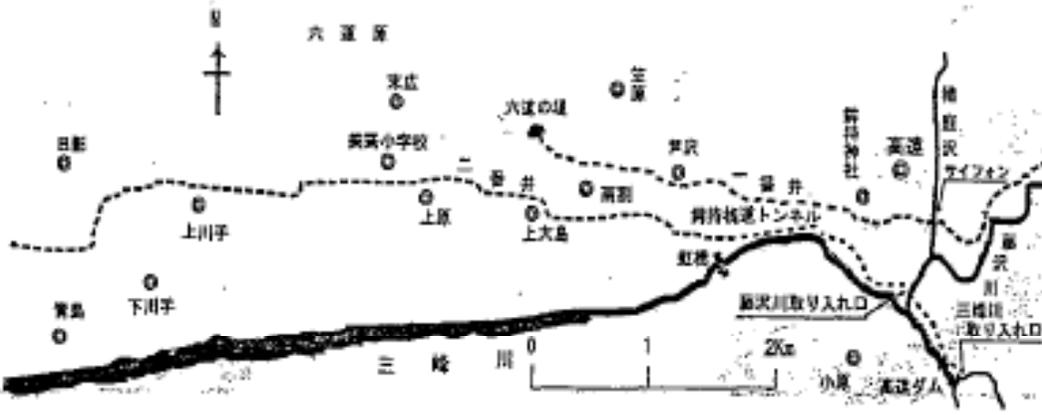


④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

天保4年（1833年）からの伊東伝兵衛（伊那市長谷杉島出身）の黒河内新井筋（お鷹岩井筋）開発が起源となり、美和ダムの残存営農対策として現在の一貫水路が誕生した。水を引水するため、長い年月を費やし幾多の挫折を繰り返して現在の一貫水路が存在する。今や美和一貫水路は長谷地域の農業全体を支える延長10km余、12年の歳月を費やした大動脈的存在であり、伊東伝兵衛の目論見から三峰川総合開発の大プロジェクトまでの歴史を辿り美和一貫水路誕生までの人々の苦労を後世に伝えていきたい。

⑤連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）



<p>①地域資源の名称 六道原一番井</p>	<p>六道井開鑿と六道堤築堤による末広村の開村と開拓</p>
<p>②地域資源の所在地</p>  <p>六道原 末広 六道の堤 三井 上原 上大島 新式川取り入れ口 三峰川 一番井と二番井の経路</p>	<p>③地域資源の写真</p> <p>・添付文面参照下さい</p> <p>(写真やイメージ図などを貼り付けて下さい)</p>
<p>④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由 (提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です)</p> <p>・幕末期に於けるこの水路の開鑿が後年の三峰川総合開発の動機になったと推察される</p>	
<p>⑤連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません) (氏名、住所、電話番号など、連絡先を記入して下さい)</p> <div style="background-color: red; height: 40px; width: 100%;"></div>	

「伊那路」上伊那郷土研究会発行

平成二十四年二月号通巻六百六十一より

一番井を中心にした美篤の発展を考える

矢島 信之

はじめに

三峰川右岸で高遠、伊那間（約七㎞）にある細長い美篤地区の地形は、三つの段丘から成り立っています。三峰川と同じ高さの下の段、美篤小学校、農協のある中段、六道地藏寺の森と井月の墓のある上段です。

私は「伊那路」平成十七年六月号に、下の段に関する「三峰川の霞堤に見る先人の自然との関わり方」を載せて頂きました。



平成二十年六月号では、中段に関する「美篤の二番井の昔と今」

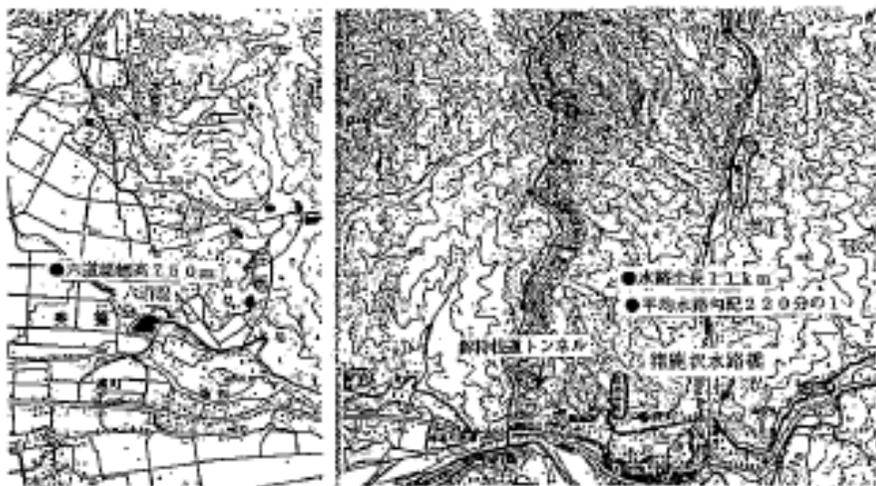
を報告させて頂きました。今回は、不勉強であった上段に関する「六道井」一番井について、実地踏査などから手にした新資料等を紹介しながら、美篤の発展の様子について発表させて頂きます。

六道井「一番井」の歴史と現状

「六道井」は、藩財政を打開するために高遠藩直営事業として、六道原一帯の開発を目指して嘉永四年（一八五二）に完成した。取り入れ口は六道原地籍、



一番井取入口 栗巾



標高七五〇m から約一km 上流の藤沢川沿いの栗巾地籍、標高八〇〇mである。高遠藩は六道原への井筋の成功を契機に、美篤中段へ揚水する井筋を計画した。安政四年（一八五七）のことであった。それにより六道井が「一番井」とも呼ばれるようになった。

そこで、現状確認と新たな発見を期待して、平成二十三年十月八日、九日の秋晴れの日、かつて美篤の末広・笠原の人達が毎日午前と午後、一日に二回水路の点検をした管理道路を、笠原の六道堤から長藤の取り入れ口の栗巾までを歩いてみた。



猪鹿沢水路橋（橋本多美氏提供）



旧度水路 迂回距離約300m（橋本多美氏提供）

であった。水路が出来るまでは、北側の山林から出てくる山水の不安定な水量により耕作されていたのが良く解る。この井筋により水量が安定して、段々状の水田が広がっていたのが目に浮かぶ。水路には何方所かの水口が設けられている。

鉾持神社境内参道を横切り、権現沢(西の沢)、西の入り沢と、日当たりのよい鉾持の山の手を通り、「鉾持隧道」の高遠側入口までを往復した。「鉾持隧道」美笹側までは通行出来ない。現在の隧道はコンクリートに改造されている。ここを最初にノミで穿った先人の苦勞は大変なことであったと想像した。隧道の直ぐ下には高遠



鉾持隧道 高遠側入口

線が見えている。高遠線と平行に、昭和三十年代まで使われた二番井の隧道がある。

さくらの湯に戻り、車を猪鹿沢の向こう側の蓮華寺に移動して、絵島の墓の脇から井筋沿いに入った。管理道路は、全線高い金網の

フェンスが張り巡らされている。鹿の害と安全面からだと思う。道路は巾もあり草丈もそれほどではないので、バイクで走れそうである。取り入れ口栗巾までの道は緩やかだ。水路の右下は現在薄暗い林の所が多いが、以前はこの井筋からの水で段々状の水田が続いていたと思われる。



向山羅重先生の歌碑

栗巾近くは右側の林もなくなり、明るく広がる田園風景となった。橋のたもとに「高遠町に文学碑を建てる会」

によって建てられた、向山雅重先生の歌碑「は、の根の竹の林の朝そよぎ、まだいとけなきうぐひすのこま」がある。また、途中の蓮華寺には今井邦子の「向う谷に陽かけるはやし此山に絵島は生きのこ、る堪えにし」と、田山花袋の「緑なれや百年(ももとせ)の後ある寺の中に見出で小さき此の墓」、更に終点の六道堤には井上井月の句碑「何処やらに庭の声聞く霞かな」がある。

私は百六十年に渡り長藤、高遠、美笹を潤して来たこ

のゆつたりした水路を「文学碑井筋」と呼びたい。

翌日九日は、美笹の権現沢に車を置き、東に進み「鉾持隧道」美笹側出口までを往復した。戻って権現沢を水路橋で渡り、子安神社前に出た。そこには「芦澤耕地整理記念碑」がある。建立は昭和十五年四月であるが、耕地整理組合を組織したのは実に明治三十八年三月で、竣工したのは明治四十二年である。耕地整理面積は「拾七町六反ノ美田ヲ得」と記されている。この碑から美笹地区の先駆性がしのばれる。

芦澤地区の耕地整理の成功から、隣接地域にもその気運が生まれた。そのような雰囲気があるためか、戦後間もなく全国的に見ても大きな規模の「美笹地区金村耕地



芦澤耕地整理記念碑

整理」の大事業へと繋がった。

子安神社から先は、芦澤・南割の原並みの上を水路は巻きながら笠原の「吉祥寺」への明るい参道に出た。そこから「六道堤」まではあとわずかである。しかしそのわずかの距離の間に、修理時の不手際から明治二十七年七月、笠原村が末広村から訴えられた落とし口の位置も確認できた。

用水管理事業に関する工夫や努力

次に、今回の実地踏査と地元の人からの聞き取りした事柄を記す。

笠原区の「水番帳」のこと

表に五六名、裏に五二名の名前が墨で記載されている。この人達と末広区とで、午前・午後を分担して一日二回、六道堤から大井口→栗巾まで二一kmの水路点検に往復した。末広区では、水の恩恵を受けない大田窪の人達も水番作業の分母に加えられた。厳しい掟であった。将来水使用が可能になった時のことを見越してのことであったらうか?

「水番札」のこと



午前当番区は、六道堤から巡視して栗巾(大井口)に水番札を掛けてくる。午後当番区のは、巡視して大井口より回収してくる。間違ひなく全額点検したこと証になった。

土搦唄「田普請」のこと

山水頼りで水の少ない笠原区で新たに開田するためには、区の許可を受けて水漏れしないしつかりした基盤を作らなければならなかった。そのために村の人々の力を借りて、八人で引き揚げては落とす重量のある「土搦石」で強固な地盤を作る。その後区の役員の検査を受けるのである。その時歌われた作業音頭が「田普請」である。(これについては「伊那路」二〇一一年五月号、十月号に上柳俊二郎さんが詳しく

く述べられています。)

温田に苦しんだ笠原と東春近田原のこと

笠原は山付きの地域のため山水が水田地帯に浸み出し、温田で大変苦しんできた。温田対策では先遣地であった「田原」へ、戦争から帰ってきた笠原の青年たちが視察に行った(「田原区誌」より)。東春地の「田原」地区も背後(東側)に段丘を背負い、西は大沢川の天井川に挟まれ、南は保谷沢川の扇状積土により地下水の上昇をきたしていた。温田の状態は、深い所では「はぞなる」を耕土の下に敷き、足掛かりを作り、股でやつと沈没を止めるような所もあった。この状況で女性が作業する様子を「あか貝が泥貝になる」と表現した。このような土地では新しい農業機械等の使用が出来ない状況となってきた。土地改良への取り組みが昭和二十年代初頭から始まった。この開拓精神が生きる地域故であろう、近年農業耕作放棄地への取り組みが全国的に注目されている。

「笠原の生活と歴史」(昭和五七年刊)中の土橋重義さん記述より

「昭和七年頃のことである。十二月も半ば頃当時の耕地

大きいのを二升札と言つて、その時の年度始めの区会で一升五合、二升

共にその原価を決定評価されて年間通用されたものである。

またその時により重労働の場合には増し札と称して若干の増分が加算された。一分増し、

二分増し、または井筋人足で非常の場合には五分増が通告されて、その場合には各々の札と同じ大きさの紙に区長の印を捺してその増分を明記してあった。例えば「五月二十日、六道井せぎ込み増札五分也区長〇〇」とされていた。これは場合によっては個人間で売買も認められていて、当時仕付の金を欲しい時には、この時分で二升札を八掛売りまたは七掛売と言つて、八〇%、七〇%で



笠原区で使用していた「人足札」4種類

の代理者の小父さんが「小びく」に裏面を入れて来て「人足札をおたのみします」と。

父が「そおかえへえそんな時になったのかなあ」「一年御苦勞様だったなあ」と言いながら、柱時計の所に紐で吊してあった春から今迄の人足に出た度毎に貰つておいた人足札を、大と小に分けて枚数を確認して帳面に記載してお渡ししたのを見ていて、これが人足札である。父が「この人足札は金より都合よく出来ているでなあ、大事にしろ」とよくさとされたことが、今も頭に残っている。

人足札は小さいのが縦五cm横三cm、大きいのが縦六cm横三cm位あったと思う。その小さいのは一月から四月、十一月から十二月の半年の間の人足の時に、一日一枚をその日の夕方参事さまが持つて来てくれた。大きい方は

笠原の生活と歴史

笠原の生活と歴史

五月から十月までの農家の忙しい時に、一日一枚を小札と同じようにその日の夕方、遅れても次の日の朝早く届けてくれた。小さいのを一升五合札、

現金で売買した。買った人はこれを年度末に代理者を通じて区役場に渡すと、正規の価格で金をくれる制度で、今の割引売買とでも言いたいところかもしれない。

当時はこの人足札以外に水の中の仕事とか、高遠の除けの穴掃除の時には増札は勿論のこと、一人高遠飯頭五個は付き、または酒一合付きとサービスしてくれた。飯頭の人は「中島屋」、お酒の人は「土屋」へ行く。人足廻し井掛りの人で末広の役員が「中島屋」、笠原の役員が「土屋」へと引率してくれたものだ。

当時、この人足札がとて有難くて、十枚になった十五枚になったと楽しみだった。また馬人足の時にはその倍が貰えるので愉快であった。人足も今のように出捨とは違って、人足に出られそうな人の家へは毎日でも割当てにきたもので、家の仕事は春早目に間に合わせておいて、井筋の人足が始まると毎日毎日出た。時々高遠飯頭が貰えるのがまた格別楽しみであった。今のよう小使い銭は一銭もなくて、お昼だけで毎日井筋人足をした年も数年もあった。

末広地区の成り立ちと分家について

水田への水かけの工夫

計測器具で実測してみると現在でも当時のままである。その大きな田んぼに水を掛けるのは大変なことである。そこで水路からの水を効率的に取り入れるために、水口が写真のように工夫されているのを発見した。

この構造なら短時間に田んぼに水を流れることが可能であり、水路に「瀬切」を入れても水路から水があふれ出ることもないと思われる。水田を作る時期に見ることとした。

おわりに

「人足札」の現物は先年佐久市の五郎兵衛記念館で見ましたが、現物とその使い方、思いについて笠原地区の



30間×300間の耕地に灌水する為の効率的な水口



末広の始まり

末広へ六道堤より水が通るようになった時、嘉永四年（一八五二）から文久三年（一八六三）頃まで、美濃「上大島」の下の段の本家から末広へ分家した二戸、そのうちの二戸は末広へ一家をあげて移住した。あと二戸は開田に尽力した工事関係者であった。

三峰川総合開発時の入植

昭和三十年代に始まった三峰川総合開発事業に伴い、美和村から十家族の人達が、末広の北西地域の平地林地帯に三峰川の水利権を持って入植した。その地区を「乾隆郷」と呼ぶ。

分家と本家の支え合い

分家が成り立つまでバックアップ出来る本家でないと分家は出来ない。

本家維持のため男子は全て養子に出す策も取られた。

末広村誕生の由来 「拓けゆく郷土」より

入植者は上大島（上大島・上原・中泉・下泉）より親に連れられて、農家の二、三男が開墾に従事した。土地は藩より無償で与えられた。割地は東西中三〇間（五四m）南北三〇〇間（五四〇m）であった。

「笠原の生活と歴史」から知ることができました。また笠原の湿田の話から、同じ問題を抱えた田原のことを知りました。さらに、戦争から帰った笠原を背負って立つ青年たちが田原地区を訪ねたことには胸を打たれました。そのような事例を今回紹介出来たことはいへん嬉しいことでした。

この場をお借りしてお世話になりました方々にお礼申し上げます。
(伊那市美術館)

伊那市創造館第6回企画展「東日本大震災復興支援特別展

「マンガの間取りと建築模型展」案内

・期間 平成24年2月3日(金)～4月1日(日)

・会場 伊那市創造館(旧上伊那図書館)企画展示室
・主な展示内容(展示期間中にイベント開催も予定)

①マンガの間取り 岩手県盛岡市の影山明仁氏作成のドラえもん・サザエさん等の家の間取り図多数

②建築模型 官城県出身で山形県在住の鎌田野可氏作成のアニメやマンガに出てくる家の模型多数

※問い合わせは伊那市創造館(伊那市荒井桜町 TEL 〇二六五―七二一六二二〇)へ。

美篤の二番井の昔と今

—三峰川本流と支流からの取水にかけた先人の苦労—

矢島 信之

美篤の地形と総合開発以前の水利

美篤地区の地形は三つの段丘から成り立っている。三峰川と同じ高さの下の段、美篤小学校のある中段、六道地蔵尊の森のある上の段である。その各段の三峰川総合開発完成前の取水は次のようであった。

下の段は三峰川に聖牛を入れて直接水を引き込んだ。目のまえに三峰川の豊富な水はあるが、洪水との闘いもあり、流れが頻りに変わるため取り入れには大変な苦労を強いられた。

上の段の水利には嘉永年間（一八四八—一八五三）に完成した「一番井」（六道井筋）が現在も使用されている。取水口は美篤東広地籍より約一〇キロ上流の三峰川支流藤沢川の上流に位置する長藤栗巾地籍である。

中段（概ね平坦にして標高七一四m、東西延長三、五〇〇m、南北最大四〇〇m）は、三峰川本流の水を東高道の花畑地籍で聖牛二〇数個を入れて取り入れ、三峰川右岸に水路を築き、弁財天橋北詰めの標高約七三五mまで揚げ、そこから北に導水して御行馬橋の少し上流でいったん藤沢川に落とし、その水を藤沢川の水と合わせてコンクリート堰堤により



〔天龍川とともに〕（久保田稔著・中日新聞）より

西高遠側へ取水し、

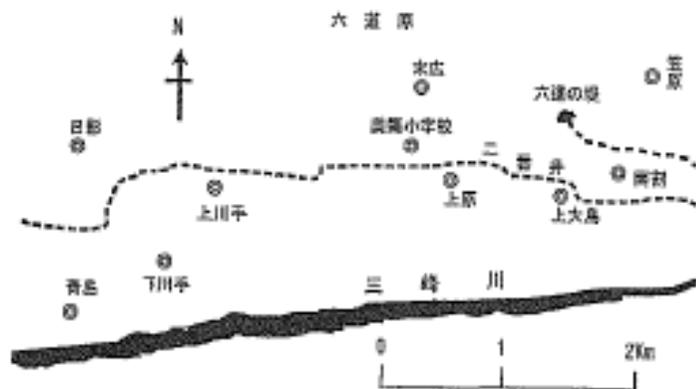
桜町の下を三峰川右岸に沿って鉾持棧道まで明渠水路で導水した。その先は鉾持

棧道下の絶壁に隧道を穿ち芦沢地籍で地上に出た。そこから中段の縁に沿って西へ導き、南割の堂の前橋で高遠線（国道三六一号）を横切つてその北側沿いに西に流し、横町・上大島・上原・中県・下県・上川手・下川手



弁財天橋北詰め付近

- ①弁財天橋（くざいてんばし）
②弁財天橋の北詰まで三峰川の水を揚げて100mほど北で藤沢川に落とした（為替水）。竹藪の中に水路の遺構がある
③藤沢川 ④三峰川



一番井と二番井の経路

二番井開発の歩みと現在

と美篤一二区のうち九区の中段地籍の田畑を潤している。最後は高遠線バス大宮口停留所付近で下の段に落水して五ヶ井水路に合流し天竜川へ注ぐ。この灌溉水路を「二番井」という。

高遠藩の事業として計画された美篤六道原の一番井の成功が、二番井開索の大きな動機になったと思われる。



「みす×隧道」取り入れ口付近

- ①「みす×隧道」取り入れ口二門
 ②左の取り入れ口から入った水は三峰右岸を明渠水路で鉾持棧道下のトンネルへ
 ③右の取り入れ口から入った水は町中をトンネル(L=833m)で抜けて鉾持棧道下で左取り入れ口から来た水路に合流する
 ※「みす×隧道」は三峰川沿いの水路が陥没に陥るために昭和25年~27年に造られた
 ④弁財天橋北詰まで揚げた三峰川の水を取り入れ口より上流に落とした
 ⑤三峰川 ⑥御行馬橋(おやらいばし) ⑦桜町方面

一番井の竣工から六年後の安政四年(一八五七)、高遠藩直営で伊東伝兵衛により二番井の工事に着手し、文久二年(一八六二)頃通水できた。水源は三峰川の下流の高遠公園下より揚水したが、三峰川の水量が少なかったため、先述のように三峰川の水を慶応二年(一八六六)

に花畑地籍より取水し、三峰川に入れて二番井の水量を増やした。そのことにより南側地籍までは灌漑できた。途中の高遠地籍も含めて五十町歩の水田開発が完成したのである。

しかし花畑地籍の取り入れ口から三峰川への落とし口までの三峰川右岸沿いの導水路は、三峰川の河原と同じ高さであるため、毎年起きる川荒れで取り入れ口はその都度破壊された。さらに鉾持棧道のがけ崩れで用水路が壊れる状態が頻りに起きた。そのため明治二十四年(一九一〇)頃には水田は二〇町歩に減少してしまった。

明治二十八年に至り、美濃青島(北原平八郎翁(当時五十二歳)の私財を投げうってでも中段の「中の原」へ何としても水を引いてくるという決意によって、十五年後、第六十七歳の明治四十二年、美濃村「中の原百町歩」は緑豊かな水田となった。この間の詳しい内容は「ふるさと美濃の水の話」(平成七年 伊那市立美濃小学校四年一組)、「高遠藩に於ける水利事業は現在まで続いている」(春日公夫氏「伊那路」昭和四十年四月号)をお読み頂きたい。

二番井の水路維持管理は三峰川総合開発が完遂するま



昭和23年8月竣工の揚水ポンプ場全景(写真提供 美濃米成の春日健氏)

- ①このあたりから二番井はトンネル構造である
 ②揚水ポンプ小屋、取り入れ口のついたコンクリート基礎は現在する
 ③水番小屋(水路上にあったようだ)
 ④揚水した水を二番井に流し込む構造部分と思われる
 ⑤揚水用鉄管保護のコンクリート管
 ⑥二番井のレベル
 ⑦高遠線(国道361号線)のレベル。水路橋(虹橋)はこの高さに左の小原方面より流れて来ている



昭和31年、鉾持棧道より望む上流(「写真集高遠のあゆみ」より)

- ①写真左段丘の割に線状の白いのは二番井の軌跡
 ②手前の水田も二番井の水を使っていた。現在は体育館、運動場の位置
 ③写真左手前の大きな土手は隧道工事で出た砂(ずり)の堆積と思われる
 ④「みす×隧道」出口は写真左側あたり
 ⑤写真右手前の台地は現在高遠小学校の位置
 ⑥雨の中の里牛は伝兵衛井の取り入れと関係はあるだろうか

される。そのためかつて二番井の難所であった場所や、農家の水路管理に付う苦勞等が忘れ去られてしまっている。

二番井旧水路跡調査と揚水機場遺構発見

そこで私は平成十九年夏と二十年三月、二番井が高

鉾持機道下「みすゞ隧道出口」付近

- ①「みすゞ隧道」出口
 (L=933m・H=1.6m・W=2.0m)
 ②揚水ポンプ小屋コンクリート基礎
 ③揚水するための三峰川の水の取り入れ口
 ④現在の三峰川の水溜



遠縁下を横切る南側の堂の前橋から、高遠ダム直下まで約四キロの旧水路跡(現利用部分も含む)を歩いて調べ、昔の人の苦勞の万分の一かを偲んでみた。以下、その時に気のついたことや裏付となる資料、貴重な写真などを見て頂きたい。

まず、上流高遠ダム真下付近から右岸には、現在の流れからもそう高くな

いところに水路の痕跡が続く。三峰川と藤沢川の合流点に掛る弁財天橋の北詰め標高約七三五mの高さまで水路は上がる。その竹藪の中に水路の石垣や大きなビューム管が残っている。さらに北に延びる水路の石垣が人家の陰に見受けられる。その先で藤沢川に合流する。しかし、現在の流入口は護岸工事により痕跡を見ることはできない。

その先はかつて御行馬橋たもとの二番井取り入れ口の「みすゞ隧道」に三峰川、藤沢川の水は流れ込み、桜町、天女橋付近の梅町、稲持町、の三峰川右岸沿いを明渠水路で下り、高遠町総合運動場の北側の緑の鉾持機道の崖まで行った。そこからは断崖をトンネルで貫けて梅垣家具店さん南の二番井の高さに繋がっていた。

ところが、右岸の水路があらちちらで傾斜に崩落するため昭和二十三年八月、鉾持機道断崖トンネル入り口に三峰川より直接揚水して水量確保をする設備が建設された。今回の現場調査で、貯水槽と推測されるコンクリートの囲い前面に「揚水ポンプ建設記念、昭和二十三年八月竣工」の文字と遺構を発見し興奮した。幸いにもそこには次のような当時の関係者の名前が刻まれていた。

耕地課課長

大久保清利(注・上伊那地方事務所)

中村忠道

宮下廣人

資材係 小林長生

二番井

水利組合管理者 矢島武治(注・当時の美穂村長)

助役 春日清文

収入役 松浦八郎

書記 中山良夫

常設委員長 武田貞治

会計 山岸實

委員 春日安 伊藤武男 渡谷駒雄

昭和二十三年八月竣工

石工 中山始一

これからわかった関係者の御子息にお話ししたところ、貴重な写真をご提供いただいた。

しかしこの設備もポンプ稼働に伴う電気料金、揚水能力などの面から抜本的対策が必要となった。三峰川から直接揚水する方法は二番井よりはるかに高いところに導水路がある一番井でも考えられたことがあったと、今回

関係者からお聞きすることができた。その考え方が出てきた理由は、傾斜に壊れる水路管理費用の持ち分割合が美穂村八に対して長藤村・高遠町が二であったという背景があったようだ。



揚水した水を二番井へ流し込む構造部(写真提供 美穂末広の春日健氏)

- ①ポンプで揚水した水を一旦溜める構造物と思われる。ここに関係者の名前が刻まれている
 ②揚水用鉄管保護コンクリート管現存する
 ③揚水した水をこの橋状の部分より二番井へ流し込んだと思われる
 ※今後土砂等を取り除いて構造を調べたい

「みすゞ隧道」の建設

そこで二番井の恒久的水量確保対策として高遠の町中の地下に、長さ九三三m、幅二m、高さ一・六mのトンネルを開けて、揚水ポンプ場設置地点まで導水する事業が計画され、昭和二十五年より工事が始まった。

長野県美濃土地改良区保管の「昭和二十五年二番井々堰普通水利組合追加更生予算書」には

隧道工事費一、五七一、四〇〇円

とある。戦後の食糧増産を根幹とした土地改良事業の立ち上がり時期であったことに加え、美濃村に上伊那郡区選出の矢島武治県会議員がおられたこともあり、補助金額は多かったと想像するが、その発想には驚く。その計画に至った背景は、二番井・一番井のそこ彼処に、先人達が江戸時代に、また下って明治時代にも鑿一つで岩盤を穿った隧道を常々目の当たりにしていたためだろうと思う。

ところで御行馬橋のたもとでの「みすゞ隧道」通水式は、昭和二十七年十月初めと思われる。その推察根拠は高遠町旭町上島写真館からの水門開水記念写真の請求書

の日付が昭和二十七年十月

十四日である

こと、また写

真の中の警察

官の服装が秋

の衣替えが済

んだ服装であ

る事などから

である。

昭和二十七

年八月二十五

日には、不要

となった揚水

ポンプと鉄管を

県道まで引き

揚げる作業の

見積書が美

濃村二番井水利

組合に白田工

業より九、〇〇〇

円で出さ

れている。また

予算書には揚

水機引き揚

げ費用として

二〇、〇〇〇円

計上されている。

また昭和二十

七年十月二十二

日の美濃村水利

土地改良

区理事会の開

催通知の議件に

・美濃中段地籍の若者達が工事作業員として働いたが、

お金を家に入れた人たちは殆どいなかったようだ。無

理もない話で、作業を終わってトンネルを出れば「桜

町」の飲み屋街であった。(美濃中興八十六歳男性談)

おわりに

今回の調査で、美濃地区民として忘れてはならない先人の足跡に出会えたことは大きな収穫であった。今後は揚水ポンプで揚がった水がどの様に二番井に注がれたか、揚水ポンプが廃止されたから美濃隧道を出た水がどの様に二番井に注がれたかを調べたい。

また市の関係部署に、この土木遺産の保護的な事を考えて頂けるよう訴えていきたい。

今回の調査でお世話になりました長野県美濃土地改良区様はじめ、多くの方々はこの場をお借りしてお礼申し上げます。またお気づきの点等ありましたらお知らせいただければ幸いです。

参考にした資料等 「写真集高遠のあゆみ」

(伊那市美濃青島)

一、揚水ポンプ小屋処分に関する件
二、旧二番井水路用途廃止並びに譲与処分に関する件
が記載されている。
年度不詳の資料には次のような記述もある。

第三節 水利状況

水源を三峰川及び藤沢川に求める、當時は藤沢川より取り入れ水田灌溉の季節は三峰川より、水量概ね四三ヶの流水を要し末流は五ヶ井に入り天竜川に流入す。高遠地籍の隧道工事により流水量を増加し得る為畑に転換せしものを今度田に復旧することが出来る。

(注・四三ヶの流水を要しとは、四三か所に分水できる水量のことである)

この文章から下流域に水が充分来なかった為水田を畑に変えざるを得なかったことが分かる。

「みすゞ隧道」工事に関する聞き書き

・家の下で掘削に発破を使用したので神棚の置物が転げ落ちた(高砂町六十三歳男性談)

・工事が進むにつれ井戸が枯れた、その事が引き金となり上水道工事が進んだ。(綾町七十五歳男性談)

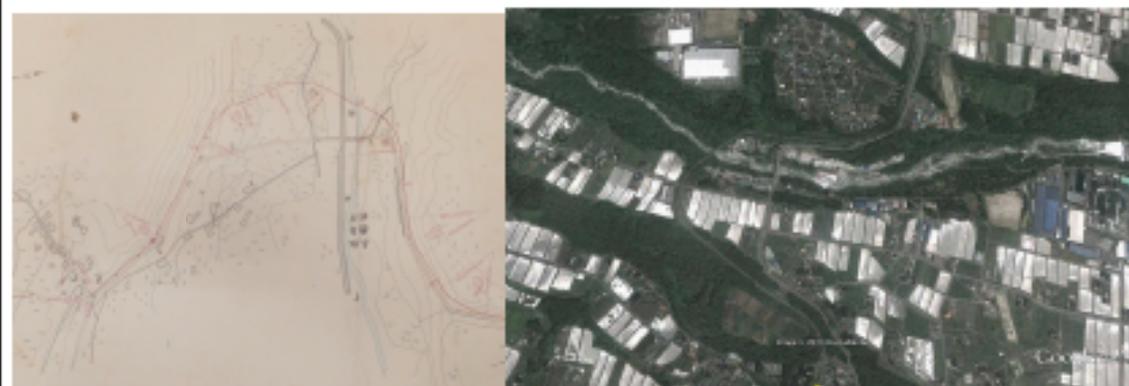
① 地域資源の名称
伊那電車軌道とΩカーブ

② 地域資源の所在地
伊那市から飯田

特に田切の川を通過する通称Ωカーブ



③ 地域資源の写真



左 明治末期～大正初め、飯田線開設のための測量図（長野県立歴史館所蔵）

右 飯島町と赤穂村（駒ヶ根市）間 グーグルアースの空中写真

④ 地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由（提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です）

伊那電車軌道は、長野県内の官営鉄道網の整備に含まれなかったが、当時隆盛を極めていた蚕糸業（製糸と養蚕）の輸送を担うため、井原五郎兵衛等の尽力により開設された 長野県で最初の民営鉄道、汽車ではない、電車方式による鉄道整備である。現在も当時の開設ルートがそのまま残り、田切地形を大きく迂回するルート「Ωカーブ」などで、全国的に有名である。

⑤ 連絡先（※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません）

[Redacted contact information]

① 地域資源の名称

- 伊那谷の風景をつくる 段丘崖、断層崖の斜面樹林

② 地域資源の所在地

伊那市 (伊那市役所の HP にも掲載されている)



図-1 伊那市周辺の段丘崖の位置

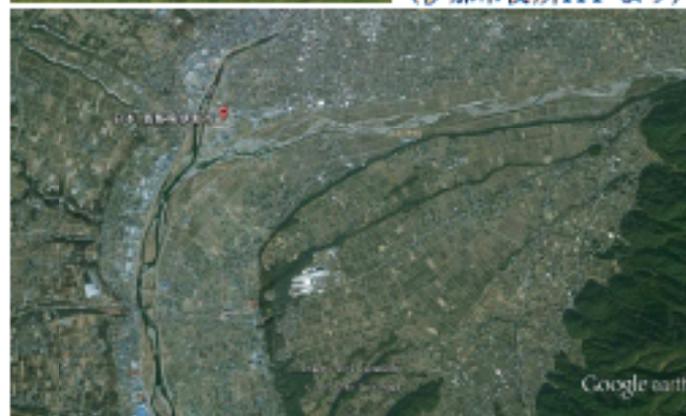
(注) 1. 点線内が市街化地域、
2. 丸付き数字は調査地点の番号。

木村和宏他 (信州大学農学部) 「天竜川河岸段丘の土地利用の変化と住民の意識」より

③ 地域資源の写真 (伊那市役所 HP)



(伊那市役所HPより)



グーグルアースより

④ 天竜川及び三峰川などの伊那市周辺の河川沿いには段丘崖、断層崖が発達し、数段の連続した崖によって独特の地形を形成している。特にこの崖には、連続的な斜面樹林が発達し、それが独特の風景、地域の景観を造りだしており、他の地域の見られない貴重な地域資源となっている。

⑤ 連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報を第三者へ開示又は提供しません)

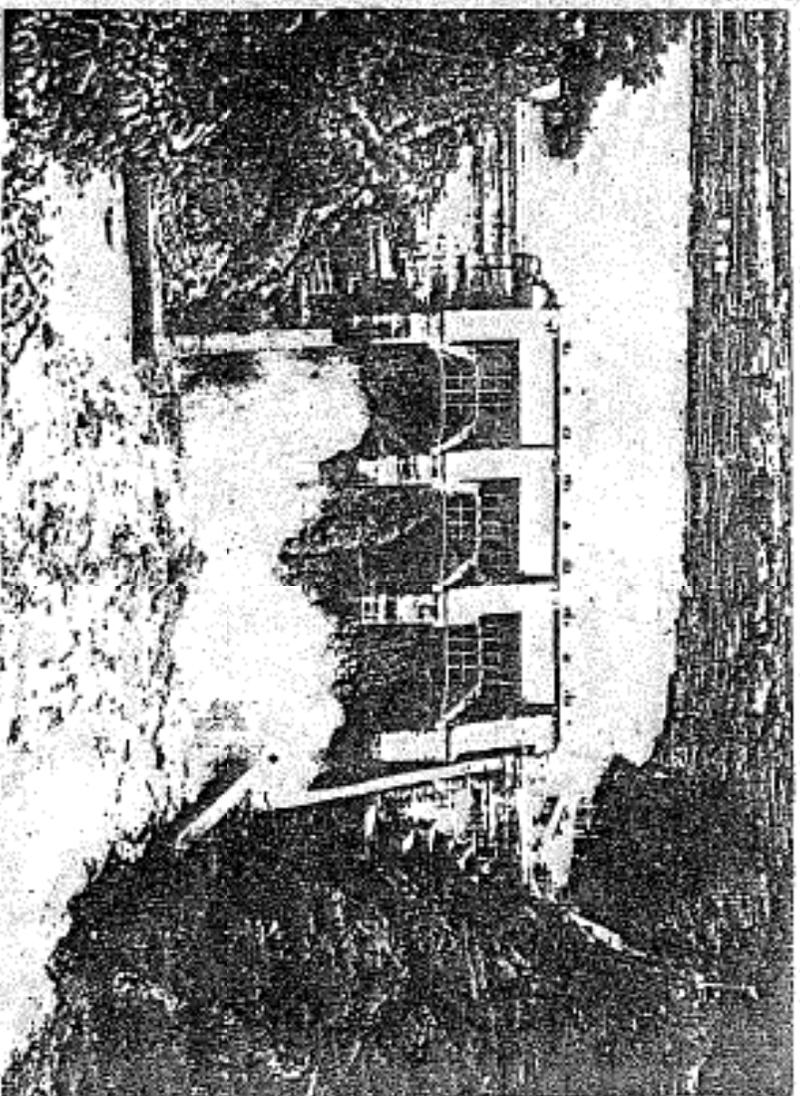


<p>① 地域資源の名称 上伊那西部台地の利水の歴史を伝える「横井戸」</p>	<p>なお、鮎三郎の井戸は横井戸の1つであるため、内容追加をお願いしたい</p>
<p>② 地域資源の所在地 上伊那郡南箕輪村、箕輪町、伊那市などに広域的に分布する横井戸群である。 (別添の分布図)</p> <p>(位置が分かるように地図などを貼り付けてください)</p>	<p>③ 地域資源の写真</p>  <p>(左 南箕輪役場横、 右信大農学部構内) (写真やイメージ図などを貼り付けて下さい)</p>
<p>④ 地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由 (提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です) 河川の利水に恵まれない当該地域で編み出された特別な利水井戸、日本に数例しか存在しない横井戸方式。遠くは大陸技術カナートの影響もあるといわれている。</p>	
<p>⑤ 連絡先 (※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報第三者へ開示又は提供しません)</p> <div style="background-color: red; height: 20px; width: 100%;"></div>	

親から子に語りつぐ

ふるさと美篤の水の話

— 4年1組みすず探検報告 —



放火する高建クム

美篤小学校ひまわり1組

はじめに

わたしたち四年一組では、「みずずの時間」のテーマに「美馬の水を調べる、ことにきめ、美馬の用水路の水が、どこから流れてきて、どこに流れていくかを、美馬探検隊を作つて一年間調べてきました。

調べていく中で、三峰川の河岸段丘にある美馬は、水がなくて荒れ地だ。土の段々中の段々として、三峰川の洪水は毎年のように苦しめられていた。その段々分かれていくところ、わかりました。

そのひとつも、みんな探検したり、不思議に思つたことを聞いていりして調べてみたら一番井や二番井ほどの用水路を作つて水を引いてきた祖先の人々のことや、洪水とただか、できた祖先の人々のことが、わかつてきました。

この本は、わたしたちが調べたり、学習に使つた資料のせいで、探検しようとする言ひてあります。みんなも、ぜひ読んでみて、美馬の祖先が水を利用したり、水にばかりおぼれて、たゆまぬ努力を知つてほしい。

四年一組一同

目次

美濃中段探検報告

ひとさじの飯 翁の恩 忘するるなかれ

―二番井と北原平八郎―

* 学校前の石碑

* 二番井の沿って探検

* 北原平八郎おじいさん

* 中の原を水田に

* 負けないぞ平八郎

1 2 6 10 11 14

美濃上段探検報告

『よんよどんよ』の歌が 聞こえる

―六道堤と一番井―

* 六道原新田開発

* 六道井(一番井)工事

* 六道堤と「どうづき石」

* 六道井(一番井)の水争い

* 六道井(一番井)を守る

21 23 26 27 29 30

* わたしたちの一番井探検

32

美濃下段・上段探検報告

苦んねくるう水とたたかい 水を治める

―三峰川総合開発と三六災害―

* あはれていた三峰川

* 上の段の一貫水路探検

* 総合開発に美濃の人々は反対?

* 起きないはずの洪水が起きた ―三六災害―

* 起ち上がった美濃の人々*

44 53 59 64 75

探検その後

美濃しく豊豆かな美濃鳥を求めて

―石碑にみる土地改良―

* 飛躍的に伸びた水田面積と米収量

* 積み上げられる土地改良

* 水に親しむ ―三峰川堤防を桜並木に―

83 85 92

①地域資源の名称 伊那市美鷲青島の千社参り	
②地域資源の所在地 同上 (位置が分かるように地図などを貼り付けてください)	③地域資源の写真 ・添付文面参照下さい (写真やイメージ図などを貼り付けて下さい)
④地域資源を「人と暮らしの伊那谷遺産」に提案する理由(提案する地域資源に対する想いを記入して頂いても結構です) 三峰川沿いの青島村が洪水に苦しめられた事から始められた伝統ある祈りの行事です 矢島利吉氏の日記明治34年(1901)7月20日に「父は千社参りに行きて・・・」とあります。江戸時代からの風習とおもわれる。	
⑤連絡先(※ご本人の同意がある場合を除き、個人情報第三者へ開示又は提供しません) (氏名、住所、電話番号など、連絡先を記入して下さい) 	

伊那市のまつり

美篤青島の千社参り

千社札の起源

千社札せんしやちら この札といえは、すぐ目にするものは、神社やお寺さんの門とか本殿の天井などに貼られている札である。手のとどこかない場所に何枚か、貼られている光景を見ることが出来る。これが「千社札」といわれるものである。

「広辞苑」によると、「千社とは多くのやしろという意味で、千社札は千社詣での人が待参して社殿に貼りつける紙札、自分の氏名・生園・店名など書いたもの。のちに図案化して木版刷りとなり、仏閣・橋梁などにも貼る」とあり、江戸時代には庶民の間に大流行したようだ。始まりは出家した花山天皇が願首霊場巡礼の際に札を納めたのが起源といわれている。

江戸時代には一カ所に及ぶ稲荷社を選択する「稲荷千社詣で」が庶民の間に大流行し、その際に自分の名前を書いた札を寺社に納めれば、札が貼ってある間は神や仏の功德が得られるとして、参詣のたびに札を貼って歩くことが大きなブームになったといわれる。もとは、信仰が目的の千社詣でであったのだが、それが高じて遊びごころに自己満足を満たすため競い合って札づくりも凝ったものになっていった。なかには札



今に生きている江戸文字の千社札
(西笑輪羽広仲仙寺十王堂の壁面)

の意匠を凝らして愛好家同士が交換するまでになったといわれ、江戸時代の庶民の心が感ぜられる。更には浮世絵の隆盛と相まって絵師同士がしのぎを削って制作するほど、あらゆる方向に札がもてはやされた。これが江戸文化の一翼を担ったことも否めない。明治以降になってもその伝承を守り続けている好事家もいて、結構、人気もあるやに聞く。

さらに千社札は、「題名納札」と「交換納札」の二つの流れができ、自分を表す住所・氏名・屋号・雅号・俗称などを「題名」といい、題名を記した札が貼ってある間は参詣しているのと同じ功德を受けるといって信仰が題名納札を支えている。神社・仏閣に札を貼ることを「札を納める」といって、貼る札は墨一色刷りが用いられ、交換を目的としたものを交換納札といって、絵柄から形や摺りに至る工程に高い技術を尽して交換された。また神社などの手の届かない高い所などに貼るのを自慢して「振り出し竿と夫婿刷毛」というのを使って、高い天井などに手際よく貼りつけるまでになったといわれている。札納めは「千日折願」ともいわれ、司を重なることによつて神や仏の恩愛を被ることができると考えられ、多くすることを誇りとする風潮もあったといわれる。

青島の千社参り

青島の千社参りは、何時頃からどんな形で行われてきたかは定かではないが、神仏の加護によつて地区民の生活安定と平穏を祈ろうという一般庶民の願いが第一の目的で、日本の各地区で行われてきた「千社札」納札の動機と全く同じであったとみることは容易に想像できる。このことは青島ばかりではなく、他市町村の村落、集落に於いてもしばしば言い伝えられ、同じ美濃地区の他の集落でも広範囲で、行われていた事実を聞くことができる。特に、今でも戦時中といわれている第二次世界大戦、太平洋戦争のあった昭和十年代のほぼ十年間、大戦に明け暮れていた時は「武運長久」を祈願するため、挙つて神社仏閣に個人で、または集落単位で折願のお詣りをしたものである。

ではなぜ青島だけが現在に至るも、毎年地区民挙って千社参りを集落の年中行事の一つとして行っているのか、非常に興味をひくところであるが、それにはそれだけの大きな理由が存在している。その幾つかを三峰川の洪水に対する恐れなどから拾うことができる。

江戸時代の三峰川氾濫・洪水年表(『美郷村誌』より)

年次	西暦	月日	模様	関係特記事項
正徳	五年(一七一五)		大洪水	
享保	十三年(一七二八)	十、九	大洪水	三峰川本流上殿島中央に切り込む
享保	十七年(一七三二)	六、九	大洪水	
元文	三年(一七三三)		大	高遠藩領内一五、〇〇〇石の損失、米価高騰
寛保	二年(一七四二)	八、	大洪水	『山岡勝人記録』によれば高遠河道路寸断
寛政	四年(一七九二)		大洪水	
文化	三年(一八〇六)		大洪水	
文化	六年(一八〇九)		大洪水	三峰川、天電川川除決壊、家屋浸水三十二戸、棟数九十六戸
文化	七年(一八一〇)	三、	大出水	三峰川、天電川合流地点にて八尺増水
文政	十一年(一八二八)		大洪水	
嘉永	五年(一八五二)	八、	大洪水	本流上殿島へ切り込む
安政	四年(一八五七)	五、	大洪水	被害甚大につき、十一月十三日高遠藩主内藤頼家参視
慶応	二年(一八六六)	七、	大洪水	
		八、	大洪水	
		八、	大洪水	
		八、	大洪水	

千社参り 前述の記録のとおり、青島には記録に残る正徳五年(一七一五)の大洪水以来、昭和三十六年(一九六一)の大洪水までその災禍に泣き、洪水と闘ってきた因縁の歴史が秘められている。たび重なる大水害をなんとか鎮めようと、寛文二年(一六六二)、四代将軍徳川家綱時代に諏訪明神を勧請して、この明神様を拠り所として全住民一体となって「千社参り」を考えつき、毎年欠かさず行うことを誓わしめるようになった。水害の歴史を見てもこの千社参りは、かなり古くから、村落の年中行事のうちでも、かなり重要視されてきたと推察できる。現在、集落の人達の話を集めてみても判然としませんが、記録として、古老の話では、明治の初め頃からすでに行事化していたことを伺い知ることができる。

左下の文面は、大正十三年(一九二四)七月二十日付け(土用入り)、青島在住矢島英雄さんの日記の写しである。これを見ると、すでに千社参りが、青島地区で定着していることがわかる。

「七月二十日、晴・曇・土用ノ入り 日曜に付き朝早くから畑の草取りに母と勝と四人で羽場の畑へ行った。午前申だけで仕事は全部終りに成ったので午前十一時頃は早々帰って来た。午後は勝と一緒に伊那町へ行って水を飲んだ。今日は土用の入で村では方々へ千社参りに出て行った。僕の祖では、西大島と末広であった。兄貴が行った。今夜宮原先生の代りに宿直であったので伊那町から七時半頃に学校へ行った」

また、矢島利吉(英雄さんの父)さんの大正二年(一九一三)の日記にも、高遠町へ千社参りに行った内容の日記が残されており、明治時代には定着していたことを伺い知ることができる。

千社参りは七月二十日 矢島さんの日記にもあるよう



矢島英雄さんの日記(写)

に、期日は始めた頃から七月二十日（土用入り）と決められていた。この頃は梅雨も明けて農作業も一段落ついていた。昔から夏の土用入りは天候もほぼ安定して田の草取りもほぼ終り、秋の収穫へ向けての節目であった。どの農家も一日農休日と定め、骨休みをとる習わしがあった。千社参りはこの一日を有効に活用して、骨休みを兼ねて、今年一年の無事と農作の折願を行うため、神社や寺院はいうに及ばず、各地区の祝殿・道祖神・水神様などの小さな祠にいたるまで、折願の標であるお札を納め歩くことにした。近年は農家の人達もサラリーマンとして働きに出る人も多くなったため、土用入りに最も近い日曜日に変更することになった。

千社参りも時代の変遷により、大戦中は「武運長久」「戦勝祈願」、戦後は「五穀豊穡」「災害防止」「交通安全」「家内安全」などと、願い事も時代に沿った内容に変化していった事は言うまでもない。

千社参りの功德　神仏への信仰により日常生活に感謝の気持ちが増え、郷土愛に目覚める。その現れが千社参りであるが、このほか、古くから信仰の対象としてきた「伊勢講・秋葉講」「戸隠講」への代参者それぞれ八名は区初参会にてくじ引きで選ばれ代参を行っている。

また火伏せ神として、秋葉神社の灯笼が毎日各戸を回ってお互いに火の用心を心掛けるなど、古き良き時代の良き風習が伝えられている。すべて連携して心をつなげて事に当たろうという共同精神は、大洪水の災禍に力を合わせて乗り切らざるを得なかった青島集落地区民の知恵となった。

昭和四十七年から作られている
千社参りのお札

奉納 千社参り 青島区

千社参りを中止したらという声が過去にあったという。しかし、もしこれを中止したなら、地区になにか禍いでも起きあがった時に、地区民に不安を与えていたのでは、という危惧を持つ人が多く、したがって、昭和の大戦中で男がいなかった時代でも家を預かる老人達や女・子供達まで休まず続けることができ、これで地域の和が広がっていった。また、農作業に夏の区切りができ、千社参りに参加しなくて家の留守番をする人たちも骨休みができ、休養

をおおっぴらにできた。また、参加した人達は日頃の農作業や作物の出来具合を話しあったり、他地区の作物の成育状況を見聞でき、且つ、脚の運動にもなった。最近では自動車の普及で多少は違う。こうやって集落の共同体意識が高められるという利点が多いとされている。この千社参りは特別の理由のない限り、参加しないという家は過去にも、現在にもない。また帰った後、貼り残しに気付か、捨てるわけにもいかなかったため、西笠輪羽広の仲仙寺へ納札した。（五十四歳の男性）

千社参りが堤防補修工事を促進　昭和四十四年時の青島区長（小林信さん）が青島堤防の改修促進の旨を建設省天竜川上流工事事務所へ陳情書を提出した。その際、陳情書のなかに、区民が毎年千社参りを実施して安全を祈願していることにも触れてあったことに、時の工事事務所長が心を打たれ、ただちに現場を視察して、翌昭和四十五年から改修工事の予算が盛り込まれることになった。これも長年にわたる区民による千社参り志願の真心が、建設省に通じたものと信じられている。（陳情書の原文は次の通り）

陳情書

当青島区は三條川の下流に位置し戸数八十戸耕地七十余町歩を有する純農村であります。区名が示す如く徳川初期は川原の中に雑草の生えた青い鳥を高さ遠望主の命で新開田をして現在に至っております。

土木工事の貧弱な徳川時代では水魔に対して完全な防備が出来得ず出水の度に水害に見舞われその都度莫大な被害を蒙り住民は炭炭の苦しみを焼回となく繰り返して参りました。

然し不撓不屈の開拓精神に燃える区民は水魔と寧ろ無敵戦いをして今日のごとき美田を見るに至りました。それ故地区民の水防に対する感覚は異常なほど熱心で他地区に先んじて青島堤防保存会を結成して自らの力で水魔から耕地を護るべく補強防備に全力を傾注して参りました。

区民の水防に対する悲願は千社参りと云う形で毎年七月二十日に近郷の神社に安全祈願をしております。これは徳川時代から今日まで三百余年の長い間区の重大行事として連続と続いております。又堤防上に水神様を祭り

毎年四月区民総出で盛大なる行事をして水防に対する意識高揚につとめております。

大正三年の大水害を契機として今日迄堤防決壊の被害はありませんがその寸前迄の被害は度々受けました。然し区民決死の防備で危険を逃れて参りましたが堤防は甚だしく老朽化し今後相当量の出水があれば忽ち決壊の危険箇所は随所に生じます。

就中、青島堤防の上方水神様の前は昭和三十六年の出水の際は沈床椿が破壊し横石が流出して決壊寸前迄になり警鐘を乱打区民決死の水防作業が功を奏して事無きを得ましたがその際制水栓で流れの進路を変えたところ沈床の上に土砂が多量に堆積されて現在に至っております。唯今外面上から見ますと土砂のため危険箇所が埋没しておりしますので一応安全の様に見えますが過去の現状を知る区民としては戦々恐々としております。

この危険箇所が一度決壊すれば青島七十余町歩の耕地と下流の境、狐島、上下新田の数百町歩に及ぶ耕地も一瞬にして流出の憂き目に遭うことは火を見るより明らかであります。近年特に集中豪雨と云う常識を越えた雨量のため甚大な被害が生じていることは周知のとおりであります。

地形的に見ましても青島区は三峰川に突出した極めて水害を被り易い地点にあります。

予算面におきまして種々制約があると存じますが以上の如く青島堤防は極めて強度の危険を内蔵している点を御賢察の上一日も早く改修補強工事が実現致します様特別のご配慮を賜り度区民を代表してお願い申し上げます次第であります。

昭和四十四年二月二十六日 伊那市美焼青島区 区長 小林 信

建設省 天竜川上流工事事務所長

大枝 市朗 殿

千社参りの仕方

青島区の年中行事であるため、区長の指示によって、区内九組の隣組（平成十一年度現在では九十五戸）がクジ引に従って各方面に札貼りに出掛けることにした。

▽日時 七月二十日（土用入り）に最も近い日曜日（平成十一年度は七月十八日であった）



役員により前日までに千社札を刷る



千社札の印刷（昭和47年以降使用）



出来上がり、束にされた千枚のお札

▽区長さんを先頭に役員四人が諏訪明神に平成十一年七月十八日午前六時、千社参りの折願をする。
千社参りのお札と供物を神前に供える。また同時にお参りの地区割表も添え、豊年万作、地域繁栄、区内安
金を祈願する。

地区割表

(平成十一年度)

- 一 上川手・下川手・青島
- 二 上大島・末広・下大島
- 三 高沢・笠原・南割・高遠
- 四 手良・福島・野底・牧
- 五 荒井・西町
- 六 坂下・山寺・御園
- 七 新田・親島・中央区
- 八 富原・東春近
- 九 西春近・西筑輪



諏訪明神にお札と供物、地区割表を供え、お祓い



区長さんを先頭に4人の役員が神前にぬかずいて
祈願、このあと区長宅へ集まる

思い出ばなし

○餅の無かった時
代、ご飯粒をマッパ
箱に入れて貼っ
た。○昭和四十七
年までは各戸で割当
て枚数のお札を毛筆
で書いたが滲んで困
った。○戦時中、女子青年が中心にお札を作った。その時期には寅年生まれの人達にはなるべく多く書いてもら
った。(寅年は、運が強く千里を帰るといったことから) ○馬頭観音と庚申様は四つ足なので、お札は貼らぬよ
うにと聞いていた。現在は双方にも貼っている。○昔は歩いていったので、今と比べ落とした箇所も少なかった
ように思う。○昔から行事が終ると、組長さん宅で懇親会をやっていた。○水筒にお酒を入れて持って歩き、南
沢釜泉で懇親会を開き帰ってきた事がある。(戦後、まもなく酒の貴重な時代だった) ○不幸のあった家の人は
行事に参加するが、お札を貼ったり、お宮の境内には入らなかつたが、あとの懇親会には参加した。○千社参り
のはか各神社の代参は欠かさない。特に秋葉様は組内では宿を決めて集まり、お祀りした等素朴なお祭り行事が
長く続いている。○千社参りは何かの事情で中止になったという事は聞いたことがない。



お祓いのあと、9人の祭組長
が区長宅へ集合。お札貼りの地区割
表を抽選のクジを引いて決める



道路端の石仏へ貼る地区の人
女性も混じり組の人々と貼るところ
を決める



道祖神に貼った直後の千社参りのお札

〔資料・写真提供は地区の方々 文責は伊那市文化財審議委員 春日公美〕